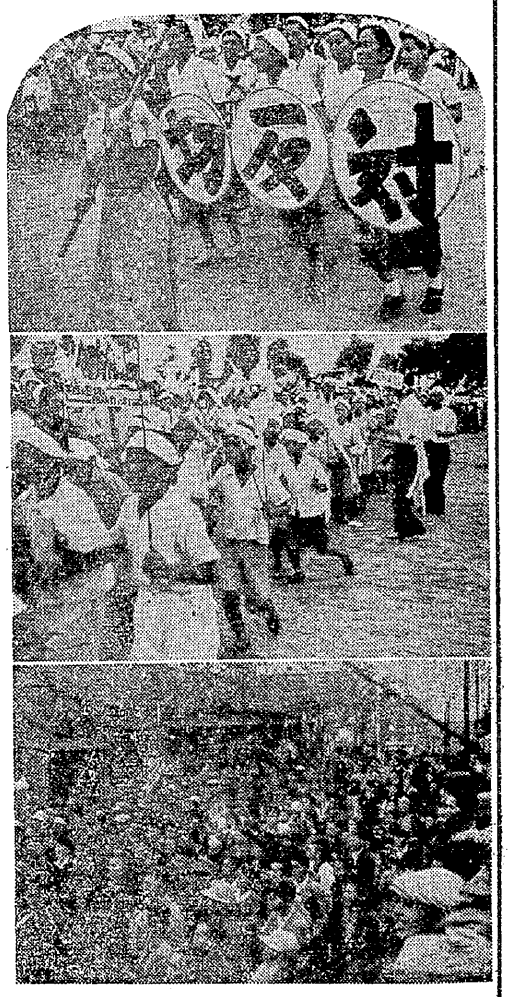
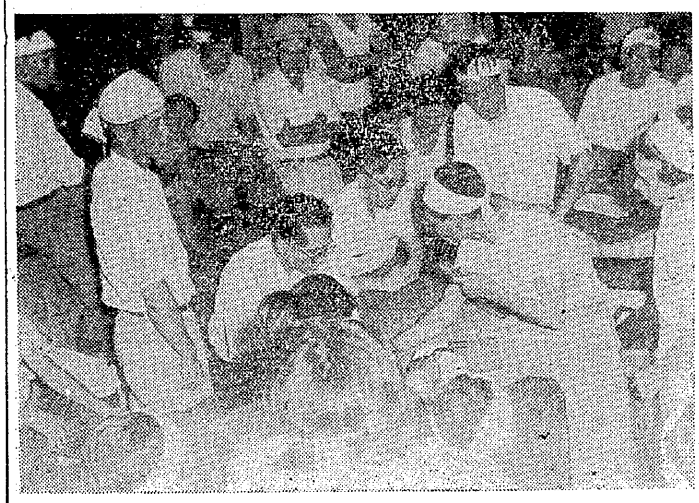
首切り反対斗争 あれから5年……

闘う態勢を固めよう 会社は分裂を狙っている

赤字だ！不況だ！首切りだ。これは資本家どものいつもの切り札である。いまり出してきている。新聞には毎日のように赤字経営の宣伝につとめている。だか。われわれは経営者の尻ぬぐいはもうご免だ。だが、理論はどうあろうとも、もう攻撃のダンビラは振上げられている。われわれは何はともあれ、これをはね返さなければならないのだ。急事態にのぞんで、私たちはあの金生命をかけて立上り、闘い抜いた一二三日の首切り反対闘争をもう一度ここでしっかり振返ってみなければならないときのようだ。



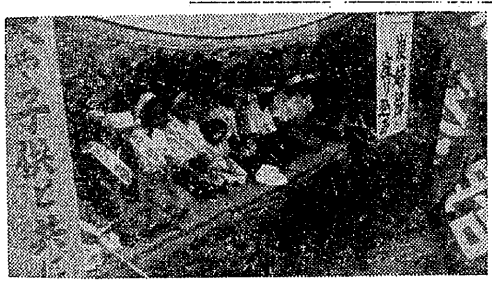
(上)立ちあがつた主婦たち
(中)子供たちもいつしよに
(下)裁判所につめかけた組合員と主婦



＼どうして首にしたのか＼詰問に顔色を失つた会社側

炎天頬をこがす酷夏より嵐風すさぶ冬にかける一二三日にわたつて闘いはつづけられた。

会社は企業合理化の名のもとに昭和二十八年八月七日、三鉱連に五七三八名の首切り案を提示してきた。なんと、これは全労働者が反対闘争に立上つて阻止しようとした悪名高きスト規制法公布当日をのである。もつともあくらつなやり方である。三池では二〇七一名を首切るというのだつた。三鉱連では「労働組合がある以上勝手に首は切らせない」というこの有名な鉄則を掲げて首切り撤回闘争に立上つた。結局、さいごに



座り込んだ主婦たち

は闘いは三鉱連の独走という形で展開されていつたのである。

残つても地獄 切られても地獄

おもえばこの日から延々一二三日にもおよぶ長期間にわたつて、組合員や主婦や子供たちをふくむ家族一人ひとりの憤激と反抗にいろどられた苦闘の連続であつた。

首切りという死の宣告を下されてそれまで最低の賃金と、最悪の労働条件に耐えしのんできた組合員と家族の怒りは心頭に発した。闘争第一声として執行部と闘争委員は各鉱所正門前に座込みを決行、会社に猛省をうながすとともに、内外にたいしてただならぬ決意を示したのである。座込みに引つづき八日には、首切りの責任者である経営者に猛省をうながすため三

(上)山の上クラブの団体交渉
(中)怒りをこめたデモ隊は本社を埋めつくした。　(下)昼も夜もなく闘つた

鉱労組二万のピストン・デモがつづけられた。

九日、地域分会の主催で全社宅三十一カ所で延べ二万五千人が集つて決起大会をひらいた。己の首を守るためには他人の首を守つてやらねばならない。〝残つても地獄切られても地獄〟みんなが助け合つて闘いへつきすすんだのであつた。

これからデモは連日のようにおこなわれた。酷夏じつとしていても汗のふきでる八月二十三日には、さきの決起大会もおとらぬ酷んな意気で首切反対をさけぶ組合員、家族三千名が、本社前をもみにもんで熱汗の大デモを敢行した。

忘れられない首切返上デモ・山の上団交

希望退職勧告期限の切れる九月四日敢行された首切り返上デモは、組織はじまつていらいの壮絶さだつた。降りしきる雨の午後一時から被通告者とその家族約二千にのぼるデモを皮切りに、一番方、常一番あがり、さらに夜に入るとともに二番方あがりも続々デモに参加、婦協もまじえて延一万二千名をこえる怒れる組合員は約十時間にわたつて完全に本社を制圧、勧告書を会社幹部にたたき返した

こうして熾烈な闘いは日を追つて白熱化し、ついにあの回期的な部分、指令ストが発令されたのである。

部分ストに突入して闘いはさらに深刻さをましていつた。その中で賃金カツトをめぐつて、あの連続四日にわたるはげしい交渉と大衆動員がかけられ、警官との対決があつたのだつた。

ついに白紙還元

こうして組合員の激しい闘志と団結のもとに交渉はつづけられ、さしも頑迷をきわめた会社側も、一糸乱れぬ組合の団結の前に十一月十一日の団交で首切り通告の白紙還元を認めるにいたつたのである。

このあと連日つづけられていたが、ついに十一月二十六日退職拒否者の原職復帰も会社組合の間で諒解点にたつし、十二月七日より就労を開始したのである。

この闘いは首切りをはねかえしたという成果もさることながら、のちに長計協定という成果をかくとくする組織の力量が高められていつた。ところが、会社はさいきんこの長計協定が邪魔になつて仕方がないのだ。赤字宣伝とともに、長期協定へのテコいれをもくろんでいる。

ときの焦点

岸NBC発言と警職法

岸発言が内外に大波をよんでいる。首相はあわてて弁明したが、相手の放送記者は、岸信介がその「政治生命」をかけた言明であり、どこでも証言すると強気だ。しかも首相はこの会見で終始「親切に愉快そうに」語つたそうだ。

どうもこの記者のいうのがほんとうのようだ。

「日本の政策の大変化というよりも、はじめて〝公然と表明した〟もの」というかれの解説もきわめて適切だ。なぜならさきんカサにかかつて打ちだす岸政府の系統的な反動諸措置の根源が、今回の発言で一点の曇りなく納得できたのだから。げんに首相みずから、あれは決して創作ではないとふしぶしみとめている。やつぱりそうだつたのである。いままでいくらか国民のなかに残つていた幻想までこれですつかり拭いとられた。いいことだ。

しかしモスクワ放送もいうとおり、これでいちばん注目すべきは、岸首相が国民にではなくまずアメリカ放送記者に腹の底をわつてみせた点だ。つまり隷人隷視の前でアメリカ帝国主義の一の子分になる神聖を盃をもらつたことである。この事実を日本国民にはどうしてしらせるか。口ではなく直接にコン棒でガーンと思い知らせる魂胆だ。例の警職法改正がまさにそれで国民ぜんたいを敵にまわすさいこの果し状だ。めざす原子戦争へのブルドーザーである。

その果し状を全国民がうけてたつた。ここ数日の刻々のうごきはそれを如実に物語つている労働者をはじめすべての心ある人びとはいそいで配慮についている。当然のことである。労働運動への弾圧、教育の反動統制秘密保護法、社会教育法改正、公選法改正、小選挙区制、予防拘禁制の復活、そしてゴールは憲法改正と安保条約のさらに能動的な改変と、まつたく明らかだ。日本は非常事態である。

いうまでもなく、これは日本が戦争陣営の運命共同体に深くつきいり、その代償にあわよくば日台・日韓を併合して往年の大東亜共栄圏の夢を一部とげることだ。ふりそめにもそれに逆らうものは容赦なくぶんなぐる警察国家の再現だ。

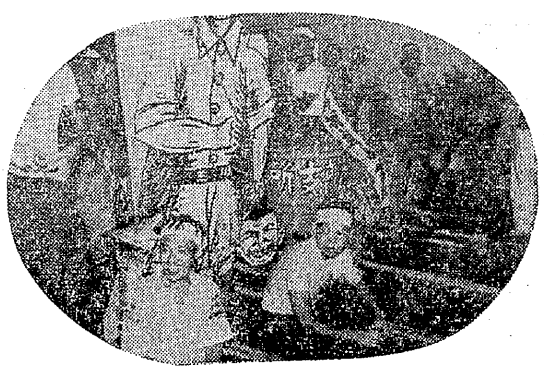
それではこれにどう対処するか。

相撲でいえば相手が時間一杯つつかけてきた。こちらもドンときまともに組めばよい。うしろにとんではたくなど策をひねりすぎるとあぶない。なにしろ相手はあせつている。四つに組めば、いまの内外の民主的な力量ならず勝てる。まずその自信をもつべきだ。「原水爆時代において人口密度の高い日本がアメリカの軍事冒険に直接参加することは、本質的には自殺行為にひとしい」とソ連報道はつたえている。中国筋も大東亜共栄圏の夢は所詮おろかだと論評した第二にこのさい最終的に、岸政府が台湾海峡ではじまつたアジアの緊張にまきこまれているという形容をわれわれがやめることだ。まきこまれてなどいない積極的かつ知能犯的に加担しているのだ。このへんをしつかりつかまえ、われわれ自身それぞれ不退転の性根をすえる時期がきている。

第三に、この自爆への道をさえぎるには勝負どころを国会だけに求めてはいけないことだ。政府与党のたよりは議席数なのだ。したがつてすべての平和・民主をめざす人びと、いや命がだいじだと知つている人は、職場と地域を問わず、あげて反対の大衆行動を起すことだ。このばあいかりにゼネストをうつても、だれも文句をいわないはずだ。起つか起たぬか、日本人ぜんぶがフミ絵を前にしている。

英雄なき一一三日の闘い

首切反対闘争は別名「英雄なき一一三日の闘い」と呼ばれている。まさしく一人の英雄もなく、全員が英雄として闘つたからこそ、あの輝かしい成果もまた、手中にお



さめることができたのである。いまわれわれに襲いかかろうとしている闘争でも、このことは肝に銘じていなければならないだろう。

次の闘いは始まつた

会社はこの前のときとは似ても似つかぬ巧妙な手で、組合おしつぶしを計画しているのである。真向うから首切りのダンビラを振りまわすような下手をことはしないのである。闘争に勝抜くためには職場闘争の推進、情宣の徹底、生活対策、組織の再点検など重要なことは山ほどあるが、なかでも大切なことは、われわれの中からは一人の英雄もだきないで闘いに取組むとともに、「みんなが仲よくする」ことが一番大事なことである。仲よくし知つている人は知らない人に親切に教えてやる。知らない人からいろいろ聞かれても怒らずに聞いてやる。そしてみんなが一つに融けあつてこそ、会社がねらつている組合の分裂、組合員間の分裂に立向い、はねかえす力となるのである。

本社につめかけた
本所支部の首切り
返上デモ隊